

# 「世界史 A における前近代の構成について」

—— 8 世紀の世界・唐王朝と東アジア世界 ——

鷓木 毅

国際化という流れの中で、国際社会に生きる資質を養うことを目的として、今年度から世界史 A という科目が始められた。この世界史 A という科目の特質は、2 単位という少ない授業時間数で、19・20 世紀を近現代とし、ヨーロッパを中心に一体化した世界を主題的にまとめて理解させるような内容構成がされている。この世界史 A において近現代は従来の世界史とそれほどの違いはないが、前近代の内容は大幅に変わった。基本的には 4 つの文化圏を中心に、その特質を理解することが中心となり、各文化圏の歴史的な展開過程については 2 世紀、8 世紀、13 世紀、16 世紀、17・18 世紀の各時代から 2 つを選び、補足するという程度にまで精選されている。こうした空白の多い前近代の扱いをどのようにすればよいのか。文化圏の発展過程を眺める時代の視点をどのように設定すればよいのか。こうした課題を考察することにした。

## 1. 世界史 A の創設

今年度から世界史 A という 2 単位の科目が新設された。中学校での世界史的分野の扱いは日本史の歴史的な背景といった程度であり、国際化という事態に対応するためには、高等学校において世界の歴史をある程度系統的に学習する必要があるとされ (①)、従来の世界史は 2 単位の世界史 A と 4 単位の世界史 B に分けられ、いずれかを必修とするよう定められたのである。この世界史 A と世界史 B の 2 つを比較すると、世界史 B は従来の世界史を引継ぐような内容構成となっているが、世界史 A は近現代を中心に構成され、近現代史の学習を重視した内容構成となっている。近現代の内容は政治・経済・文化など多角的に考察するなど、世界史 B とほぼ同じ視点でまとめられているのに対して、世界史 A では前近代の内容が従来の世界史と大きく異なっている。世界史 A では前近代の歴史は、近現代の世界の歴史的意義を理解させるために、諸文明の特質を知ることと、幾つかの世紀において世界の全体的なイメージを描かせることにその重点が置かれ、時間的にも空間的にも、大きく歴史をとらえさせるように (①) という意図で構成されている。世界史 A の内容を具体的に示すと以下のようなようになる。

### (1) 諸文明の歴史的特質

- ア 文明と風土
- イ 東アジアと中国文化
- ウ 南アジアとインド文化
- エ 西アジアとイスラム文化
- オ ヨーロッパとキリスト教文化

### (2) 諸文明の接触と交流

- ア 2 世紀の世界
- イ 8 世紀の世界
- ウ 13 世紀の世界

- エ 16世紀の世界
- オ 17.18世紀の世界
- (3) 19世紀の世界の形成と展開
  - ア 19世紀のヨーロッパ・アメリカ
  - イ 産業革命と世界市場の形成
  - ウ アジア諸国の変貌と日本
- (4) 現代世界と日本
  - ア 二つの世界大戦と平和
  - イ アメリカ合衆国とソヴィエト連邦
  - ウ 民族主義とアジア・アフリカ諸国
  - エ 地域紛争と国際社会
  - オ 科学技術と現代文明
  - カ これからの世界と日本

こうした世界史Aの前近代の扱いに対して、河南一氏は近現代重視というより、前近代の軽視であるという指摘をしている。(②)これに対し、原田智仁氏は、世界史Aの前近代は、従来の世界史の内容を単に薄めたものではないとし、独自の視点が必要であると提唱する。原田氏によれば、前近代は、諸文明の風土や民族性に規定され現代にいたるまで変わることのない「構造」の上に、諸文明がそれぞれ独自の生活・文化・経済のシステムを形成し、世界に諸文化圏共存という状態が形成された時代であると規定し、近現代はヨーロッパ(アメリカを含む)において資本主義の発達にともない、新しい一体化した世界システムが登場することによって始まったとする。(③)原田氏も指摘しているように、この世界史に対する時代認識は従来の世界史にも見られたものである。世界史Aの課題は、文化圏を理解するために2単位という限られた時間の中で、網羅的に歴史を扱うことができず、内容構成には独自の視点からの思い切った集約化、焦点化が必要であり、授業時数の配分も適切でなければならない(①)ということである。

## 2. 世界史Aの前近代の扱い

世界史Aにおいて前近代は指導要領ではどのように構成されているのであろうか。学習指導要領で示された世界史Aの前近代は次の2点を特色としている。

1つは、内容的に従来の文化圏学習の流れをひき、世界の諸文化圏の理解に重点が置かれているということである。主にヨーロッパ・イスラム・中国・インドの4つの文化圏を軸に構成され、従来と同じく教科書によっては東南アジア、中央アジア、アフリカ、古代アメリカ文明などが取り上げられることがあっても、基本的には上記の4地域が中心となっている。新しい点は地理A・Bなどとの関連を強調するなど、この諸地域の歴史・文化の基礎となっている風土、民族、言語、宗教などに着目させ、より多角的・総合的に理解させるように求めていることであろう。しかし逆にこのことは、歴史学習の本質でもある時間的な流れというもののある程度は無視しなければならないということにもなる。

2つには、諸文明の歴史的特質、文明の接触・交流、現代文明というように文明という視点から歴史を考察させるように構成されていることである。このうち諸文明の歴史的特質、文明の接触・交流が前近代として扱われ、現代の歴史を理解するために必要な基礎的知識を学ばせる前段として内容を構成するよう求められている。前近代の前半部である諸文明の歴史的特質は、内容的には、諸文明の成立を農耕及び牧畜の発生、都市文明の成立、古代帝国の発展という古代文明の展開を押さえた上で、東アジア・南アジア・西アジア・ヨーロッパにおけるそれぞれの古代帝国の成立とそこで育まれた文化を、儒教・ヒンドゥー教・イスラム教・キリスト教といった各文化の基礎となる宗教などに触れながら理解させるように構成することになっている。ここでは世界各地で成立し発展した諸文明が、今日において世界の諸地域における社会・文化の重要な基盤となっているという認識の上に、未開から文明に至る人類の道程を概観した後で、自然環境と文明内容との関連をふまえながら、文明が地域的に広まりを持つに従いそこに普遍性と独自性を併せ持つようになるという諸文明の特質を理解することが主目的とされる。諸文明の歴史的な展開はそれほど重視されず、従来の通史学習にみられる、ある文明の発展に即して網羅的に人名や事項名を並べるという形式は否定されている。

前近代の後半部の諸文明の接触と交流は、2世紀、8世紀、13世紀、16世紀、17・18世紀の各時代から2つ程度を選択し、諸文明の接触と交流の歴史を中心に、同時代の諸地域の文化を世界史的視野で比較させることで、文化・文明に対する多様なものの見方を養うことが求められている。前半部において諸文明（文化圏）の特質を理解させているので、後半部では前半部と重複しないように、諸文明について相互の接触・交流の様相についてのテーマを設定するなどして学習することにより、ある特定の時代の世界の全体像をつかまえさせることが必要とされる。ここで設定されるテーマについて、具体的には2世紀では「シルクロードの交易」、8世紀では「各文化圏の主要都市」、13世紀では「マルコ＝ポーロやイブン＝バトゥータの世界旅行」、16世紀では「コロンブスの航海」、17・18世紀では「諸文明の建造物や芸術作品」などが示されている。(①)

以上のように、世界史Aにおける前近代の扱いついては次のようなことが言えると思う。最大の問題であった時間数の問題については、歴史学習の特徴である時間の流れに沿った変化に重点を置かず、諸文明の特質の理解に必要な歴史的事項のみを取り上げるということで解決をしようとしている。その結果、従来当然のごとく触れられていた王朝が成立する過程の段階の人名や事件や年代といった歴史的事項は大きく削減されることになる。このことは莫大な量の歴史的事項を暗記することが中心とならざるを得なかった従来の歴史学習を変える一方法であると思う。しかし反面、諸文明の特質を理解させることに重点が置かれ、数世紀にわたる時間の流れを圧縮して扱うために、学習内容が地理の学習に近いものになってくるという側面もある。こうした欠陥を補うために後半部で各世紀ごとの世界の状態を概観するということが必要となって来るのであろう。しかし19世紀に至るまでの時代を5つ挙げ、そのうちの2つを取り上げてもこの不足した部分は埋められるはずはない。逆にいままでの習慣から抜け出せない歴史教師は、その空白部分に不安感や未充足感を抱いてしまう。また、取り上げた2つの時代にしても、その扱いは概括的なものにしかならず十分なものとは言えない。すべてが中途半端になってしまうのである。

こうした問題を補うために、後半部を構成する別の視点が必要となってくる。そこで世界史Aでは文化圏の理解に加え、さらに諸文明の接触と交流というテーマも掲げている。しかし、この諸文明の接触・交流というテーマは果たして有効な視点となっているであろうか。諸文明の間で様々なモノや文化やシステムが、戦争や交易を通じて相互に影響を与えあった。近現代においてはヨーロッパで成立した資本主義のシステムがアジアやアフリカ、中南米諸国を巻き込み、これらの地域では根本的な社会の変質を迫られた。しかし、諸文明が成立し、それぞれの文化圏が形成・発展する過程にあった前近代において、ヨーロッパ・イスラム・中国を中心とした世界の3大文化圏が相互にどれほどの接触・交流をしたのであろうか。原田氏は文明の交流という事象を宮原一武氏の論を引用して、「接触は一方的でも可能であるが、交流は双方向的でないと成り立たない、つまり、受け入れ側に相手側の文明を理解し、消化しようとする意志と能力が不可欠なのである」とし、風土や民族性に規定されて形成された諸文明を構造的に理解した上で初めて理解できるとする。(②)

しかし、果たして前近代に原田氏の言うような交流があったのであろうか。一方的でも可能とされる接触に対して、交流は文明同士が双方向に影響を与え、ある特定の文化的システムを共有するようになって初めて可能とされる。前近代において、それぞれの文化圏は独自の歴史的発展をしており、だからこそ文化圏学習が可能なのであり、文化圏が相互にある特定の文化的システムを共有するという事実は認められないのではないか。こうした意味での交流は、ヨーロッパが資本主義を発達させ、武力を背景に世界をヨーロッパの論理で秩序づけしていった近現代において初めて行われたのではなかろうか。原田氏は交流の事例として東アジア文化圏における冊封体制を挙げ、「冊封体制を支えた思想が概念、冊封関係にともなう儀礼や慣行の意味となると、中国文化を中心とする東アジア文明の構造的把握がなされていないと理解できない」(②)とされている。しかし、これはまさに世界的な諸文化圏の交流ではなく、東アジア文化圏の中での中国と周辺国との交流ではないだろうか。2世紀、8世紀、13世紀、16世紀、17・18世紀の各時代において文明同士が双方向に影響を与え、ある特定の文化的システムを共有するような世界的な交流はなく、それぞれの時代におけるそれぞれの地域の王朝(もしくは国家)が接触をしながらも、独自のシステムを維持していたのではないだろうか。このように考えるならば、文明の接触・交流というテーマの下では諸文明の構造の変化・発展を中心とした内容構成にはならず、各時代をフラッシュ的に概観するという内容構成におわってしまう。これでは歴史の授業は深まらず、生徒が興味を持つような授業にはならないのではないか。文化圏に共通する構造を視点として設定する必要があるのではないだろうか。

### 3. 8世紀の世界 —東アジア文化圏における唐帝国—

世界史Aの前近代の扱いについて、どの世紀を取り上げればよいのか、その世紀をどのような視点で見ればよいか、この問題にある解答を提示できるのが8世紀の世界と17・18世紀の世界であると考え。今回は8世紀の世界がどのような意味で適切であるかを以下考察することとする。大河川の流域に、その地の自然環境に大きく影響されながら始められた農耕文化は、神殿を中核とし、都市を建設する。こうした都市国家から始まった人類の文明は、次第に小国家をつくり、やがて小国家が併合されて大帝国内を形成するまでに至る。西アジアではアケメネス朝ペルシアが、地中

海ではローマ帝国が、東アジアでは秦漢帝国が成立した。この地域では大帝国の中心とする政治的・経済的・文化的なまとまりが形成され、「文化圏」と呼ばれるものが成立する。これが古代の完成である。

古代の大帝国はやがて内部の矛盾を解消できず、崩壊に至る。弱体化した巨大な先進文明地域には周辺から異民族が侵入し、混乱の中から新しい秩序をもった中央集権国家が誕生する。地中海ではゲルマン民族の大移動という混乱期を経てフランク王国が成立する。西アジアではペルシア人の古代帝国がアラブ民族の侵入で瓦解し、代わってアラブ人によるイスラム帝国が形成される。東アジアでは漢帝国滅亡後、五胡の侵入などにより魏晋南北朝の混乱期を迎える。この時期に、均田制や府兵制が創設され、中国は隋唐帝国にまとめられる。衆生の救済を目指したインド仏教は、中国では個人の救済だけでなく為政者(国家体制)を加護するものとして導入される。いわゆる鎮護国家の思想として国家の保護を受け、東アジアの地に発展する。こうして7～8世紀に転換期を迎え、滅んでいった古代文明に代わり、周辺の諸民族がキリスト教・イスラム教・仏教といった世界宗教を基盤として、新しい政治秩序を確立した中央集権国家が誕生する。8世紀という時代は、世界史が中世を迎える世紀なのである。

〈8世紀の世界〉

	古代帝国とその矛盾	侵入異民族	世界宗教	新しい秩序
ヨーロッパ	ローマ帝国 奴隷制の崩壊 →地方分権化	ゲルマン民族	キリスト教	荘園制度(農奴制度) 封建制度
イスラム	アケメネス朝ペルシア パルチア ササン朝ペルシア	アラブ民族	イスラム教	コーランに規定された法体系・日常生活
中国	秦漢帝国 豪族の台頭 →地方分権化	五胡	仏教	律令体制 冊封体制

世界の各文化圏は7～8世紀に完成される。そしてこの文化圏の枠組みは19世紀になり、ヨーロッパの資本主義の発達により変質を迫られるまで継続していくのである。世界史Aにおいて「諸文明の接触・交流」の有り様を描こうとするときに、7～8世紀に形成された文化圏の枠組みを揺るがすような劇的な接触・交流はなく、すべての文化圏の構造を変えるような変化は存在しない。逆に各文化圏ごとに独自の理論の下に、中核-周辺という構造が形成されていった時代である。

ヨーロッパでは、ローマ帝国の遺産とキリスト教を基盤に、ゲルマン民族への布教とあいまって、ローマ=カトリックの教会ヒエラルキーが整備される。このローマ=カトリックを中核としたヨーロッパは十字軍活動を通じて、周辺地域にヨーロッパのカトリック文化圏を組織化していった。

西アジアでは、アラブ人による侵略活動と商業活動により、周辺諸民族のイスラム教徒への改宗が進むなか、イスラム世界はアジア～アフリカ～ヨーロッパに広がり、コーランに規定された共通

の生活様式を有するイスラムの文化圏が成立する。このイスラム文化圏はアッバース朝期にはバグダドの建設などによる国際商業活動の活性化に伴い、この街を中心として世界的な大商業ネットワークが形成されるのである。

同じように東アジアでは、均田制＝租庸調税制＝府兵制を整え、この制度を科挙の選抜試験制度により選抜された有能な官僚を登用して運用する完成度の高い政治制度が確立した。さらにこうした先進的な制度の完成を受けて、周辺諸国は唐王朝に引き寄せられてくる。こうした周辺諸国に対して唐は中華思想に基づくいわゆる冊封体制の下、中国皇帝の居城である長安を中心とした東アジアの国際秩序が形成されるのである。このように三つの文化圏は共通して、古代帝国の構造的矛盾、侵入異民族、世界宗教、新しい秩序という要素を内容構成の枠組みとして有しているのである。各文化圏において「十字軍活動とヨーロッパの拡大」、「国際商業活動とイスラムの拡大」、「冊封体制と東アジア文化圏の形成」というテーマで中心－周辺の形成がなされ、文化圏が拡大していくのである。7～8世紀はこのように各文化圏が独自の論理で周辺地域を取込み、文化圏を拡大しながら、文化圏の完成期となった時代であるといえるのではないか。こうした視点こそ三つの文化圏に共通するものであり、こうした視点に基づく内容構成こそ必要なのではないのであろうか。

#### 4. 授業構成

唐の時代に確立された律令体制は、周辺諸国に進んだ統治機構として大きな影響を与えた。日本においてもこの制度は積極的に導入され、8世紀には大宝律令の制定により一応の完成をみた。同様に東北地方の渤海や朝鮮の新羅、さらにはヴェトナムなどにも導入され、こうした地域でもそれぞれの国の実状に即応し発展した。まさに唐は東アジア文化圏の中心として発展したという性格を有している国である。

律令自体は隋唐時代以前から存在するとされるが、格式なども加わり体系的に整備されたのは隋唐の時代である。この律令体制は皇帝を中心とした中央集権的な国家秩序の確立にある。唐では均田制を施行し、従来中央政府に対抗してきた豪族が支配してきた人民を、中央政府が掌握し、さらに豪族を科挙によって官僚として支配体系に組み込むことであった。この科挙の選抜制度に基づく官僚制度は儒教的な精神に裏打ちされ、律令という法体系に整備された完成度の高い統治機構であった。唐ではこの支配体制の下で身分秩序も固定化され、階級社会へと変貌していく。こうした支配体制の確立により、唐は東アジアの中心国としての地位を築いたことを理解させたい。

##### ◎ 国際関係（冊封体制）

中心（唐帝国）

↑↓

人・物の交流 → 遣唐使

周辺諸国

##### ◎ 国内統治体制（国家 仏教・律令体制）

〈国家仏教〉

・鎮護国家思想を伴った仏教保護政策

- ・現世救済を求め る民衆の仏教信仰

### 《律令体制》

- ・科挙試験を通し た人材登用法
- ・律令に基づく行政（高度な官僚機構）→ 科挙試験と官僚

### ◎ 単元計画

- ・古代文明の終焉 — 混乱の時代 —
- ・イスラム文化圏の成立
  - コーランに支えられた世界
  - 国際商業圏の拡大とイスラム
- ・唐帝国の成立
  - 魏晋南北朝の混乱期の收拾
  - 律令体制の成立
  - 長安の繁栄 — 冊封体制 — … 本時
- ・ヨーロッパの成立
  - カトリック教会とヨーロッパ世界
  - 十字軍活動

### ◎ 本時の到達目標

- ①唐の時代に確立された律令体制は、周辺諸国に進んだ統治機構として大きな影響を与えた。
- ②律令体制は皇帝を中心とした中央集権的な国家秩序の確立であった。
- ③唐は均田制・租庸調制・府兵制により人民から租税・労働力を収奪した。
- ④唐は科挙という官吏登用制度により、豪族・貴族層を官僚として支配体系に組み込んだ。

### 《授業展開過程》

発 問	教授学習過程	資料	学 習 内 容
◎ 8世紀に日本と中国(唐)の関係はどのようなものであったか。	T.発問する。 S.答える。	資 1	・日本は遣唐使を派遣し、唐の先進的な政治制度(律令体制)を積極的に導入した。
◎日本の遣唐使達には唐はどのように映ったか。	T.説明する。	資 2	・唐には西域や東アジアなど周辺地域から多くの人々が訪れ、世界的な大都市として繁栄していた。 ・多くの人々とともに物産・文化も流入し、都長安は国際流通文化センターの様相を呈していた。
◎唐の律令体制はどのような制度であったか。	T.説明する。		・律令体制は有能な高級官僚を使い王朝に富と権力を集中させる仕組みであった。

			戸籍-郷里制-均田制-租庸調制-府兵制 科挙-律令体系-官僚貴族 ・唐の支配は、全国から科挙の試験により集められた有能な高級官僚が、律令に基づき行う仕組みになっていた。
◎日本からの留学生である阿倍仲麻呂がなぜ唐の役人になれたのか。	T.発問する。 S.答える。	資3 資4 資5	・唐では異民族に対する差別感が少なく、多くの外国人が唐の役人となっていた。 ・唐は外国文化に対して寛容であり、外国の商人が多く訪れた。その結果長安を初め揚州・広州・泉州などに数多くの外国人が訪れ、唐という時代は国際性豊かな時代であった。 ・唐の皇帝は中国の君主であると同時に、周辺諸民族共同の君主(天可汗)という立場に立っていた。(冊封体制)
◎唐が東アジア地域にどのような影響を与えたか。	T.発問する。 S.答える。		・周辺諸国は唐の政治体制を模倣し、国家体制を整備するとともに、民族的な自覚を高めるといった結果をもたらした。

#### 〈資料文献〉

- 資1 坂本賞三 福田豊彦監修 「新選 日本史図表」 第一学習社  
 資2 若山 滋 「ローマと長安」 講談社現代新書  
 資3 京大東洋史辞典編纂会編 「新編 東洋史辞典」 東京創元社  
 資4 京大東洋史辞典編纂会編 「新編 東洋史辞典」 東京創元社  
 資5 原田智仁 「探求的歴史授業の教材開発」 『社会科研究』第38号

#### 〈注〉

資1は日本から遣唐使の一覧表、資2は長安城のにぎわいの描写、資3は安倍仲麻呂の略歴、資4は唐の官職一覧表、資5は冊封体制の概念モデル図である。

#### 5. おわりに

世界史Aの課題は前近代の内容をいかに精選するかということであった。しかし、世界史Aのように5つの時代の中から2つを選び、文明の接触・交流というテーマで歴史を学ぶという内容精選の方法は、ともすれば、それぞれの文化圏を構造的に把握し、その時代的な変化をたどるといふ、本来歴史学習で学ばなければならない最も重要な内容を欠落させてしまうことになる危険性がある。こうした危険性を除くためにも、今回提示したように、文化圏に共通する視点を設定することが必要だと思われる。



＜参考文献＞

- ① 『指導要領解説地理歴史編』
- ② 河南一「中等歴史カリキュラム再編成の視点—新指導要領における『多様化』の検討を中心として」『社会科教育論業』第37集
- ③ 原田智仁「探求的歴史授業の教材開発」『社会科研究』第38号